

2013 年度 小委員会活動成果報告

(2014 年 3 月 28 日作成)

小委員会名	室内空気質環境設計法改訂小委員会		主 査 名：野崎 淳夫 就任年月：2013 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (企画刊行運営委員会)		委員長名：田辺 新一 主 査 名：佐土原 聡
設 置 期 間	2013 年 4 月 ～ 2015 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>2005 年出版の「室内空気質環境設計法」は、現室内空気環境小委員会（当時の委員長は故吉澤 晋先生）がシックビルディング症候群やシックハウス症候群の予防・対策を目的として、各種汚染物質に対する実用的な室内環境の設計手法をまとめたものであり、世界に先駆けた専門書である。</p> <p>ただし、近年では本書執筆時に比して、新たな問題となる汚染物質が加わり、また、汚染物質濃度低減のための設計手法にも変革要素が求められる。</p> <p>そこで本小委員会では、当該書籍の改訂版出版を目的として、その内容についての検討を行う。</p> <p>2013 年度：室内空気環境の設計手法に関する情報収集を行い、既往出版物「室内空気質環境設計法」に新たな知見を加えた改訂版の目次を編成し、添付の目次案を参考に執筆者の選定作業等を行う。</p> <p>また、執筆者に対し原稿作成を依頼し、また提示原稿の検討を行い、加筆・修正などの指示を与える。</p> <p>2014 年度：初年度同様に、とりまとめ等の諸作業を行い、原稿間の調整作業を行う。収集原稿をもとに出版社と打ち合わせを行い、原稿の修正作業を行う。修正原稿に対し、パブリックコメントを求め、これに基づき最終原稿案を決定する。</p> <p>さらに、最終原稿を出版社に提出し、校正作業を行う。出版本をもとにシンポや講習会を開催する。</p>		
委員構成 (委員名 (所属))	<p>委員公募の有無：無</p> <p>主査：野崎淳夫（東北文化学園大学大学院） 幹事：一條佑介（東北文化学園大学） 委員：野口美由貴（成蹊大学理工学部）、柳 宇（工学院大学）、鍵 直樹（東京工業大学大学院）、林 基哉（宮城女子大学）、山中俊夫（大阪大学大学院）、長谷川兼一（秋田県立大学）、東 賢一（近畿大学）、光田 恵（大同大学）、長谷川麻子（熊本大学大学院）、鈴木昭人（ニチハ（株））、村上栄造（朝日工業社（株））、香川謙吉（ダイキン工業（株））、湯 懐鵬（新菱冷熱工業株式会社）</p>		
設置 WG (WG 名：目的)			
2013 年度予算	300,000 円	ホームページ公開の有無：無 委員会 HP アドレス：	

項 目	自己評価
委員会開催数	5 回（年度内計画を含む）
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	
講習会	

<p>催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画</p>	
<p>大会研究集会</p>	
<p>対外的意見表明・パ ブリックコメント等</p>	
<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得ら れた成果との関係)</p>	<p>1. 室内空気環境の設計手法に関する情報収集を行い、既往出版物「室内空気質環境設計法」に新たな知見を加えた改訂版の目次を編成し、添付の目次案を参考に執筆者の選定作業等を行う。(90%) (各委員が所属する工業会や企業に寄せられた苦情や相談事例などを収集・整理した。また、行政や企業団体などが発行したガイドブック等の内容を検討し、新たな知見に関して検討した。)</p> <p>2. 執筆者に対し原稿作成を依頼し、また提示原稿の検討を行い、加筆・修正などの指示を与える。(80%) (既往出版物「室内空気質環境設計法」に新たな知見を加えた改訂版の目次を編成し、添付の目次案を参考に執筆者の選定作業等を行い、原稿執筆を依頼した。)</p>
<p>委員会活動の問題点 ・課題</p>	<p>1. 委員の出席状況はよく、特に問題はない。 2. 執筆期間が短いため、効率よく、執筆・査読を進めることが課題である。</p>

*小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

*表中の「(書名)」等の赤文字は、記述を誘導するための説明である。記載の有無にかかわらず最終的には削除のうえ提出すること。

*小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

*中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学委員会用 自己評価欄

2013 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>1. 室内空気環境の設計手法に関する情報収集を行い、既往出版物「室内空気質環境設計法」に新たな知見を加えた改訂版の目次を編成し、添付の目次案を参考に執筆者の選定作業等を行う。(90%) (各委員が所属する工業会や企業に寄せられた苦情や相談事例などを収集・整理した。また、行政や企業団体などが発行したガイドブック等の内容を検討し、新たな知見に関して検討した。)</p> <p>2. 執筆者に対し原稿作成を依頼し、また提示原稿の検討を行い、加筆・修正などの指示を与える。(80%) (既往出版物「室内空気質環境設計法」に新たな知見を加えた改訂版の目次を編成し、添付の目次案を参考に執筆者の選定作業等を行い、原稿執筆を依頼した。)</p>

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。